



「歌一筋に生きて」

くに い す み こ
國井スミ子

1935年(昭和10年)
栃木県大田原市生まれ
船堀在住



情操音楽教室

結婚した翌年の昭和32年、主人と二人でバイオリンとピアノと歌を教える音楽教室を始めたんです。音楽を通じて心豊かな人間になるような教育をしたいと、名前を「情操音楽教室」と二人で相談して決めました。

わたくしたちは武蔵野音楽大学の同窓生で、二人とも子どもが大好きなんです。そのころ、ピアノ教室はありましたがバイオリン教室はなかったですから、楽器店からの紹介が多く、遠くまで出張もしていました。

情操音楽教室の演奏会は、毎年3月に開催していて、来年で55回になります。始めのうちは四谷駅前の主婦会館や、当時は神田駿河台にあった日仏会館などでしたが、昭和58年に江戸川区総合文化センターができてからは区内で。現在はタワーホール船堀で、わたくしのコーラスのサークル、主人のハンドベルのサークルやバイオリンの孫弟子さん、娘夫婦の音大の生徒さんの発表が中心です。

昭和63年から18年間、60歳を超えた方々が学ぶ、江戸川区くすのきカルチャー教室でコーラスの講師をしていました。「こんな老後があるなんて」ってみなさん喜んで、卒業してもサークルを作って続けているんです。80、90歳の方もいらっしゃいます。喉は鍛えれば衰えない。高い「ソ」まで出しますよ。ピアノを77歳から始めた人もいます。始めるのに遅いということはないんです。聴くだけよりやれるってことは、すごい自信になりますよね。

20年くらい前から、グリーンパレス子ども教室「キンダーコール」の講師もしています。就学前のお子さんが1年間、合唱や合奏を楽しく学ぶ教室です。主人に伴奏してもらい、「大きな栗の木の下で」をみなさんと手拍子しながら歌ったり、子どもさんが2、30人でお父さんやお母さんと「かえるの合唱」を輪唱したりします。「お母さんしっかり歌ってね、お子さんに負けないで」とか言って。

美しい詩の童謡や唱歌はいいですね。ほんとに、これからは歌い継いでもらいたいという思いで、みなさんと歌っているんですよ。合奏では打楽器の他にハンドベルもします。子どもさんたちもよく覚えてくれて、3月に修了公演があるんですよ。みなさんが喜んでくれますので、張り合いです。

ふるさと大田原から音楽の道へ

栃木県北東部の大田原町(現大田原市)で生まれ、女5人、男2人きょうだいの下から2番目、みんな歌が好きでしたね。母はご詠歌や民謡、踊りをやっていました。父は鉄工所を経営していて、とても働き者でした。わたくしは小さい時から、「聴かせて」って言われると、堂々と、ものおせず歌っていましたね。

小学校の時は、他の学校の先生たちがみえた時とか、遠足で雨に遭った時に歌われましたよ。運動も好きで近所の川で泳いだり、スキーをしたり、ドッジボールをすると最後まで残りましたよ。中学校の音楽の先生が、わたくしの声に合った曲を選んでコンクールに出してください、放課後にピアノも教えてくださいました。音楽の道に進みたいと思ったのは、その時ですね。

県立大田原女子高等学校に入った年、武蔵野音大新卒の先生がみえたんです。大田原には男子校の県立大田原高校もあって、カラコンと、高下駄を履いて歌いに来るんですよ。男子がいない女子校ですから、窓からみんな首出してね、「わあ、男の人が通っている」とかね。混声合唱をやり、ソプラノをソロで歌わせてもらいました。それで、先生が「音大に行きなさい」と。

先生が勤めるなら頑張ろうかなと思いましたね。一生懸命、学校のグランドピアノで練習しました。大田原は、よく雪が降る寒い所で、手とか足が冷たくて。手を揉みながら温めての練習でした。朝早く自転車で行って、学校が始まる前に練習しました。

東京にも月2回くらいレッスンに通いました。授業が終わって、お掃除もみんなと同じにやってから、電車で2時間くらいかかってね。親はもう、それは覚悟だったんじゃないですか。子どもが大勢いたのに苦勞してね。歌を楽しんでいるわたくしを見て、音楽の道に入れてくれたんでしょうね。それこそ「頑張らなくちゃいけない」って思いましたね。

昭和28年、練馬区の武蔵野音楽大学の短大に入学。寮生活は4人部屋で、みんな仲良しで楽しかったです。練習、練習の毎日でしたが、生徒の数ほど練習室が無くて大変でした。朝は7時前に校門が開きましたら、突入して確保しないと練習できないんです。電球が付いてなくて、みんな

